

村井信仁著『北海道農業機械化の歴史』

本誌の巻末広告にある通り、村井信仁氏が本誌創刊以来、執筆した原稿を中心にまとめた『北海道農業機械化の歴史』を発行した。総索引を含めて7分冊、総ページ数912頁で箱入りの大著である。定価は7200円（税別・分売不可）。

第一巻目のテーマは「耕す」。本誌の創刊にあたって村井氏には「耕すということ」というタイトルでの連載を依頼した。「耕しつづける人へ」というサブタイトルをつけた本誌にとって村井氏の連載は本誌発行の理念の一つを示すものであった。

人はなぜ耕してきたのか。掘棒に始まり現代のプラウや鋤、その他様々な土耕機の数々が紹介されている。耕すこと、人が耕し続けることの意味、その技術的意味ばかりでなく、風土の違いの中での進化の歴史、文明論が語られた。

二巻、三巻、四巻では畑作機械化の歴史が語られている。それも現場の篤農家たちの声を聞き取りながら進んできた施肥・播種機、防除機、スートンピッカ、カルチベータ、ビーン

ハーベスタなどの機種別の発展史、大規模な畑作野菜経営を可能にしてきた機械化の歴史が語られている。さらに五巻ではその後の北海道の農業機械化と農産業発展をリードしたバレイショ澱粉産業や今はない亜麻産業の発展史が解説されている。

また、今では貴重な資料と言わしき写真類も本誌掲載時に使われたものをすべて再録してある（写真・1487点、図・111点）。

村井氏との出会いは、筆者がまだ新人の農業機械雑誌の編集者であった1970年代初頭、先生が北海道立中央農業試験場や十勝農業試験場の機械科長の時代だった。当時から道内各地の農家や農機メーカーとの強い結びつきを持ちながら文字通り北海道の農業機械化をリードする立場におられた。また、北海道といえどもせいぜい50馬力程度で大型と言われた時代に100馬力超のトラックの時代が来ると、その経営的意義を検証する研究にも取り組み、それに対応する多連プラウの開発をはじめ道内各地にあった不良土壌・土質を改良するための様々な機械の開発にも取り組むなどまさに北海道農業をリードした村井氏なのである。

村井氏は1955年に帯広畜産大学を卒業した。大学卒の学士が道内農機メーカーに就職することなどあり得なかった時代に、当時のプラウメーカーだった山田トンボ農機(株)に就職し、そこでは持ち前の体力を生かしてハンマーをふるってプラウを叩いたという。その後もインドへの2年間の技術指導経験を踏まえて道立試験場に採用され、さらにインドネシアやブラジルなどへも長期間の技術指導に赴いた。そんな生き方が農業界に稀有の研究者、指導者としての村井信仁氏を生んだのである。道立農試も定年を待たずして北海道農業機械工業会に入り、道内業界をリードした。さらに67歳で工業会専務を退任すると、その年齢にもかかわらず農地を購入し、実際の農家になった。その模様が「67歳からの新規就農日記」の連載になり、農家でない自分の研究指導の在り方への反省を含めて農業への思いを語った。その新規就農日記を含め折々に村井氏が本誌に投稿された原稿を第六巻の「機械化営農余話」としてまとめた。

村井氏が語り続けた『北海道農業機械化の歴史』を皆様にお勧めしたい。巻末広告にある本間正義氏および高井宗宏氏の推薦文も合わせてお読みいただきたい。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。